

過越を祝う エズラ 6:19-22

1. 捕囚から帰って来た人々は、第一の月の十四日に過越のいけにえをささげた。祭司とレビ人たちは、ひとり残らず身をきよめて、みなきよくなっていたので、彼らは捕囚から帰って来たすべての人々のため、また、彼らの兄弟の祭司たちのため、また、彼ら自身のために、過越のいけにえをほふった。

(6:19-20)

- a. 過越の祭りは出エジプトの時代に制定され(出エジプト 12:6)、奴隷の足かせから救ってくださった神の御手のわざをつねに心に留めるためのものである。さらにクリスチャンにとっての過越は、罪の力からの霊的救いがイエス・キリストの死によって成就されたという預言的なしるしである。
- b. 聖書の中で過越は重要な意味を持つが、旧約聖書の中では5回しか記述がない。そしてそれは新たな、あるいは回復された礼拝を記念し、神との契約を持つ人々が真剣に再献身を誓うものである。私個人的にはこれはイエスが弟子たちに新しい契約を与えられたときに言われた「わたしを覚えてこれを行いなさい (ルカ 22:19)」という命令と全く同じだと思う。
- c. 祭壇と神殿が再建されいけにえは再びささげられるようになったが、再び国を挙げて過越を祝うようになったのは単に必要な道具や建物が揃ったからだけでなく、祭司やレビ人たちが身をきよめたことにもよる。もちろん祭壇や神殿、きよめも大切であったが、ゼカリヤは大祭司ヨシュアの霊的な面でのきよめにも言及している(ゼカリヤ 3)。

2. 捕囚から戻って来たイスラエル人と、イスラエルの神、主を求めて、この国の異邦人の汚れから縁を絶って彼らに加わったすべての者たちとは、これを食べた。(6:21)

- a. 過越の食事が祝われたが、ここではバビロンから帰還した人々と、バビロン捕囚時代にエルサレムに残りながら異邦人の汚れから縁を絶った人々が区別されているのがわかる。そしてエルサレムに残り異邦人の汚れに染まった人々は祝いに参加しなかった。
- b. もし自分が捕囚期間中エルサレムに残り、目の前で神殿が壊され、同胞が捕らわれ、奴隷にされ、不当な扱いを受け、虐げられるのを見、今住んでいる世界に同化するか、あるいは違う神と違う信仰を持った強大な国に征服されながらも親から譲られた信仰を守り通すかの選択を迫られた民の一人だったらどんな気持ちになるか考えてみよう。
- c. 多くの人々が異郷の文化に吸収されてしまった。一部の人はずぐに同化してしまい、ある者は数年、あるいは数十年異文化に染まらずに持ちこたえたいと思うが、70年も耐えることを想像できるだろうか？ それゆえ過越が貴重な意味を持つのである。過越は絶望的な状況の中に神の救いの御手が働いたことを記念している。それは神がなされたすばらしい御わざを思い出し、神がもう一度それを行なってくださることの確認である。「『権力によらず、能力によらず、わたし霊によって。』と万軍の主は仰せられる。(ゼカリヤ 4:6)」

3. そして、彼らは七日間、種を入れないパンの祭りを喜んで守った。これは、主が彼らを喜ばせ、また、アッシリヤの王の心を彼らに向かわせて、イスラエルの神である神の宮の工事にあたって、彼らを力づけるようにされたからである。(6:22)

- a. 彼らは過越の祭りだけではなく種なしパンの祭りを祝った。これもイエスが成就された預言的なしるしである。
- b. 聖書を通して種はしばしば罪の象徴である。この祭りの期間中、きよめのしるしとして人々は家中にある種を取り除き種の入っていないパンを食べる。
- c. イエスは罪(種)のない人生を送ることによってこの祭りを成就されたが、またご自身の体をもって世の罪を背負い墓に葬られたという事実は、この祭りで種が家の外に出され埋められる行為と似ている。私たちがイエスに信仰をおくと、将来成就されるこれらの祭りに私たちも参加できるというだけでなく、現在の救いにも与ることができる。